

広瀬 鎮さんを悼む

1994年5月29日、広瀬鎮（しずむ）さんは愛知県瀬戸市の病院で、帰らぬ旅に立たれました。63歳、まだまだ活躍して頂かねばならないお年で、早々の旅立ちでした。1年過ぎたいまでも、もうお会いすることができないとは、信じられない思いです。

広瀬鎮さんは、1956年、立命館大学法学部を出られ、1958年には日本モンキーセンターに入られました。生物学系の研究者の多いなかでは異色の存在でしたが、サルの研究と文化人類学とをむすび付けるのに心を尽くし、1969年には同センターの学芸部長となり、サル学の普及のために、東奔西走の大活躍の日々を送っておられました。「社会教育施設としてのモンキーセンター」とか「博物館としての動物園」と言ったことを、単なるお題目でなく、地に着いたものにするために、体を張って実践してきた方でした。1986年、日本モンキーセンターをお辞めになり、名古屋学院大学の文化人類学の教授となられ、サルの鳴きまねで始まったりするユニークな講義で聴く人を魅了し、多くの人々を文化人類学やサル学や博物館学の分野に引き込んでいました。

当、全日本博物館学会の創設にも広瀬鎮さんは参加し、初期の熱心な委員として、特に中京地域を中心とした地方会員の組織化を図り、学会の例会の地方での開催を積極的に推し進めました。時には、広瀬鎮さんが、その創設や運営で役割を果たしていた日本動物園教育研究会との共同主催の例会を実現させたりされてきました。

「ヒロチン」とか「チンさん」とか声をかけられると、サルに学んだと思われる独特の笑顔に向け、私のことを「アッチャン」と気さくに呼んでくれた広瀬鎮さん、もう、あの人なつっこい笑顔に接することが出来ないのは寂しいことです。立たれた旅路の安らかなることを心よりお祈りいたします。

（小森厚（社）日本動物園水族館協会専務理事）

追悼、大塚明郎先生

科学技術館（東京都千代田区）の初代館長を務められ、本学会創設以来顧問としてご指導下さった大塚明郎先生が、平成6（1994）年5月31日心筋梗塞のため逝去された。95歳のご高齢であった。

先生は、ご専門の物理学、特に光学・原子物理学の分野で多くの業績を残されたばかりでなく、物理教育、科学教育に関しても多大な貢献をなさってきた。大学等における専門教育に限らず、初等中等教育の向上充実にも情熱を捧げられ、国の教育行政に対する助言の労も惜しまれなかった。例えば、理科教育振興法の成立には、先生のご尽力によるところが大変大きかったとされている。太平洋戦争で荒廃したわが国の小・中・高校に、この法律に基づき理科各分野の実験設備が整えられるようになったことは周知の通りである。

先生は、学校教育とともに、自然科学の裾野を広げる場として博物館の役割にも早くから注目しておいで、国際会議等で海外にお出掛けの折によく博物館に足を運ばれ、特に欧米の科学博物館事情に精通しておられた。科学博物館の主要な機能として、科学・技術の成果を収集、展示すること、および青少年をはじめ一般公衆に科学・技術の面白さをアピールする場としての役割を果たすことの二つを指摘され、これらのバランスを取りつつ、個々の館のフィロソフィを具現化するべきとお考えであった。東京教育大学教授を定年退官後に就任された、科学技術館（昭和39年4月一般公開開始）の館長職は、先生のご経歴やご見識から見てもことにうってつけであった。

先生が手掛けられた数多くの博物館関連のお仕事の中で、最も重要と思われるものは、博物館に関する国際会議の組織と学会の創立だ。

1966年夏、東京大学を中心に開催された第11回太平洋学術会議（PSC）第12部門「学術情報と博物館」の chairman として、会議の組織運営に当たられた。博物館に関する国際会議がわが国で開かれたのは、この時が最初と思われる。ここで発表された博物館に関する論文は8編だったが、うち1編は、先生が吉村典夫研究室員を指導してまとめられた共著論文、“A Statistical Study of Visitors of Some Museums”で、先生が筆頭著者、口頭発表は吉村氏が英語で行った。

なおこの国際会議を組織するのにあたり、PSCの他の部門には、当時わが国が参加する背景になる学会がそれぞれ整っていたが、博物館に関する学会はまだなかったため、先生は、第12部門の総務幹事であった鶴田総一郎氏（当時国立科学博物館）らとともに、日本博物館学会を創立された。創立までに時間の余裕が乏しく、ご関係の方々が大変苦心をされていたことを筆者も覚えている。しかし、折角創立されたこの学会も、PSC終了とともに実質的な活動を停止したまま今日に至っている。これとは別の機関として発足したわが全日本博物館学会の呼称に「全」の一字が冠せられている歴史的な事情に思いを致すとき、大塚先生の博物館に対する情熱が、この「全」の一字に結晶して、われわれ後進を絶えず激励して下さっているようにも思われ、大変貴重なものと感じている。

謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（牛島一郎 編集委員）